

木造校舎の改修工事(2)

-校舎の現状-

青森から東京へ向かう国道4号線を陸奥湾沿いに進むと夏泊半島が湾に突き出ている。その半島の付け根のあたりを山側へ入った人里離れたところに、この木造校舎は建っている。最深積雪量が1.7mの多雪地域である。東日本大震災(2011年)のとき、このあたりは震度5程度だったというが、その揺れにもびくともしなかったというだけあって、新築から90年を経た木造校舎の構造材は極めて健全であることが現地調査によって確認された。しかし一方で、キツツキに勝るとも劣らない幾つかの問題も出てきていた。移築(昭和47年)以降の法改正による課題や、部分的な増改築が繰り返されたことによる不備である。棟同士の離間距離の不足、それを補うための更なる不具合、面積、防火区画の不備、更には校舎北端の下屋部分(女子トイレ)の沈み込みも確認された。耐震診断・耐震補強工事に加えて断熱改修、法適合への修正、新たな女子トイレの設置などが必要になり、準寒冷地在住とのことで設計に参加させて頂くことになった次第である。

創立者の気高い志により昭和30年に塾としてスタートし、昭和49年に高等学校として生まれ変わったこの学校は、宗教教育を根幹とした人間形成と、少人数・全寮制の教育で多くの優秀な人材を輩出している。全国各地で活躍される卒業生の方々が、卒業後も熱心に学校の運営や管理などに尽力され、頻繁に学校を訪れていることは、ここでの高校生活の重さを物語るものだろう。今回の耐震改修工事も、卒業生の方々の熱意と頑張りがなければ到底実現できるものでなかったことは明かだ。豊かで厳しい自然の中で親元を離れて学ぶ高校生たちを、行き届いた少人数教育と卒業生の方々の熱意が支え続ける、そんな学校だからこそ、価値ある木造校舎が大切に使われ続け、奇跡的に生き残ることができたのだろう。

初めて訪れたのは3月下旬だった。あたりはまだ雪が多く残り、除雪車が入れないところは1階部分が雪に埋まるほどだった。中に入ると磨き上げられたヒバの分厚い床板が目を引き、立派だ。雪深い土地で90年、年月を経て多少の傷みはあるが、この大正時代の木造校舎は誇り高く私達を迎え入れてくれた。先生がたの東北なまりはなつかしく、ふるさとの仙台弁よりもゆったりとして、その抑揚にも癒やされる思いだった。



ヒバ無垢板の光る廊下

人里離れた土地、純朴な先生がた、その時どきの学校の要望もあり、たびたび工事関係者が訪れていたようで、男女それぞれの寮も含めれば、かなりの頻度で設計者、施工者が出入りして部分的な改修が繰り返されていたようだ。しかし、“校舎は補助金付き鉄筋コンクリート造へ”という巨大な流れに押し流されそうな時も瀬戸際で踏みとどまり、貴重な木造校舎を100年先の生徒たちに遺すという方向へ大きく舵を切った卒業生の方々や先生がたの生き様は、それ自体が大きな教育だと思わずにはいられない。



中庭を見る



長期間雪に埋もれ
錆びて危険な鉄骨階段

当初は本棟だけの耐震改修の依頼だったものが、校舎全体の機能改善を含めた耐震改修および断熱改修工事となった。改修の要点は以下のようである。

- ・全体面積を縮小し各棟の離間距離を確保する、さらに防火区画を整備する。
- ・本棟の耐震診断および耐震補強、断熱改修。
- ・劣化が著しい棟の減築、除雪機能を妨げる不審な壁の撤去。
- ・離間した各棟の渡り廊下として防雪シェルターを配置する。
- ・防火戸の整備。

これらの工事は相互に関連性を持つものであるが、基本に据えたのは、高等学校として出発した昭和 47 年当初の姿に戻すという考え方だった。

(つづく)